

スリフトの非表象理論（NRT）の研究

—— 現代社会をどうとらえるか：原理論の提起 ——

大橋 昭一

I. まえがき

(1) 本稿の課題と論述限定

ここで“非表象理論”（non-representational theory : NRT）とは、イギリスの著名な論客、スリフト（Nigel Thrift）らにより提起されている“non-representational theory”をいう。

スリフトは、イギリス、ウォーウィック大学教授であり、かつ、オックスフォード大学招聘教授である。ここで主として取り上げるのは、かれの2008年の著『非表象理論—空間・政治・情動』（Thrift, 2008）であるが、同書の冒頭には、異例にも（同書刊行書店作成と思われる同書内容案内的な）1頁の序言的紹介文が掲載されている。

それによると（ただしカッコ内の注記文は本稿筆者のもの。以下同様）、「本書すなわち『非表象理論—空間・政治・情動』は、日常生活の政治（the politics of everyday life）に対する実に注目されるべきアプローチを提示している。政治および政治的なものが展開されている空間（space）の多様性について論じつつ、知覚（perception）、表象（representation）および実践的行為（practice）の意味するところを論究し、かつ、知識の限界（margin）にあるところのその場限りの実践について、価値評価することを目指している」と紹介している。その上で、叙述の中心論点は次の3点にあるとしている。

- ① 非表象理論についてかなり広まっている論議の模様を広範にサーベイすること。
- ② 社会科学と人文科学で基本になるものは、（旧来主流的な）表象理論的アプローチではなく、経験論的（experimental）アプローチであることを提議していること。
- ③ 種々な政治ジャンルを構築する（construct）運動の原点になること。

これをみると、同書は単に非表象理論の提起に志向しただけのものではなく、何よりも現代社会のあり方について、日常生活の政治のレベルからこれを問い、解明を志向したものとみることができる。本稿筆者としては、なかんずくこの点において実に注目すべき力作と考え、スリフトの非表象理論を、この観点においてレビューするものである。非表象理論については、わが国でもすでに取り上げられているが（例えば泉谷洋平氏（泉谷, 2001））、本稿は、あくまでも、スリフト説を現代資本主義社会分析の基本原理という観点で取り上げるものである。

スリフト自身の言葉をみると、同書本文冒頭において、「私（スリフト）は、ここで『非表象理論』と名づけた本を公表すべく、直接的には1990年代初頭以来準備してきた。具体的には本書

は、1996年の拙著『空間の形成』(Thrift, 1996)および2005年の拙著『知識資本主義』(Thrift, 2005)に直接連結するものである。本書を併せてこれら3冊の書は、一体のものであり、いわば“同一の経済・兼・文化・兼・政治の解明の試み”(the same economic-cum-cultural-cum-political venture)と位置づけられるものであり、…そして本書の多くの部分は現実の事例の骨組み(the bare bones of actual occasions)についてのみ解明を目指したものである」と書いている(Thrift, 2008, pp.1-2)。

ここには、スリフトのこの書の目指すところが明確に示されているが、理論体系という点でまず確認しておくべきことは、ここでスリフトが述べているところによると、スリフトが“非表象理論”という場合には広狭2義があることである。

すなわち、このスリフトの論説では、その理論構成において中核となる原理的理論部分を非表象理論としている場合もあれば、それを現代社会の全面的分析に適用した全体をいう場合、すなわち、いわば“現代社会の非表象理論”というべきものを意味している場合もある。

本稿筆者では前者の場合を“狭義の非表象理論”，後者の場合を“広義の非表象理論”とよんで区別している。そして本稿で論究課題とするものは、前者の“狭義の非表象理論”であって、特に断わりがない限りすべて、前者、すなわち“狭義の非表象理論”をいうものである。

まずこの場合、注目されるべき論点として、非表象理論(狭義の場合を含む)という場合、本稿で後述のように、それは1つの単一の理論(theory)ではなくて、複数理論の集まり(theories)をいうものであるとする主張があることである。実はこの点は、すでに2010年シンプソン(Paul Simpson)により論じられている。

シンプソンは、(スリフトの提起している)非表象理論は、実際上は“1つの現実的理論”ではなくて、“いくつかの理論の集まり”(something more)である。それ故それは本来“non-representational theories”と複数形で表記されるべきものであって、こうした複数性は、例えばポスト構造主義論(post-structuralists), 現象学(phenomenologists), プラグマティズム(pragmatists), フェミニズム(feminists)などにみられるものであるとしている(Simpson, 2010, p.1)。しかしスリフト自身は、これを明確に単数として、すなわち“non-representational theory”として提示しているので、本稿ではそれを正規の表記としている。

なお、シンプソンによると、“non-representational theory”すなわち“非表象理論”という言葉は、スリフトに始まるものである(Simpson, 2010, p.1)。そしてイギリス地理学会(Royal Geographical Society)では、“非表象地理学”(non-representational geographies)が2020年大会の統一論題の1つになっている(RGS-IBG, 2020)。

(2) 非表象理論の意味

スリフト説において方法論的に何よりも注目されることは、前記刊行書店案内の②において、この書は、旧来主流であった“表象理論的アプローチ”ではなくて、“経験論的アプローチ”をとるものとされていることである。この点からみると、スリフトの“非表象理論”では、何よ

りも“表象理論”の前に「非, すなわち non」という言葉 (接頭辞) の付くことが注目される。これは、どのようなことを意味するものであろうか。本稿筆者としても、まず、この点が論究されるべきものである。

これは、本稿筆者の結論を先にして総括的にいえば、スリフトの論説では、旧来からの記号論説、なかんずくパース (C. S. Peirce) の記号を“レプレゼンテイメン” (representamen) する考え方、すなわち「記号 = 表象」という考え方は、「ノン」であること、つまり否定されるべきものであることを提議しているのである。ここではそれは、直接的には“表象”に拠るのではなくて、“経験論的理論”の考え方の展開・発展に拠るべきであると提起されているが、この場合の“経験論的理論”とは、端的には“非表象理論”をいうものである。

このことは、いうまでもなく“広義の非表象理論”にも妥当し、現代資本主義社会の分析にあたっては、旧来的な「記号 = 表象すなわちレプレゼンテーション」という考え方は「ノン」であり、“経験論的立場”, すなわち“ノン・レプレゼンテーション論”, つまり非表象理論の立場”がとられるべきことをいうものである。

この場合、スリフトが否定するところの、旧来的な記号論的な考え方の特性は、どのようなものか。それは、本稿筆者のみるところ、現実の事象が“(本質と) 現象”というレベルではなく、(“本質”と理論上区別された) “現象”についても、記号レベルで表象されたものというレベルでとらえられたものになるところにある。その場合表象は、“現象”から2重の意味で乖離したものとなる。というのは、“現象”はまず記号として表象される際“現象”からの乖離が生じるが、その記号は記号受け手において表象されたものとして認識されるから、その時点でさらなる(2度目の) 乖離が生じるからである。

つまり、事象は、記号として提示されているものの表象という主観的レベルで解されるものとなるから、それは端的には、現実(“現象”として) あるものではなく、単にそれぞれの人の頭脳の中にあるものであって、改めて考えてみると、そうしたものがあらしいと観念されるだけのもの (conception) となる。例えば“社会”とか“政治”というものも、そうした主観的なものとして、すなわち個々の人間の頭脳の中にあるだけのものと規定される。

これは、アメリカにおいてエスノメソドロジー (ethnomethodology) として注目を浴びているものであるが (Watson, 2017, p.46), スリフトはこうした“客観的現実の否定論”に反対し、改めて“客観的現実の経験立脚的理論”の推進を図るべきことを主張しているのである。

エスノメソドロジーについては、スリフトの著でも、現代における政治課題に関連して言及されている。それによると、克服されるべき現代社会の状況について、それを一言でいえば、シュールレアリズムとしてとらえ、そうしたシュールレアリズムの1つの形態が、エスノメソドロジーであると措定されている (Thrift, 2008, p.19)。

この点は、記号と情報との違いとも関連する。情報は事実をいうが、記号は基本的にはそうではない。すなわち記号 (の意味するもの (meaning)) は人間が作ったもので、恣意的なものである。

故に記号は、必ずしも事実そのものではなく、虚偽のものを示すこともある（詳しくは大橋, 2018）。

非表象理論という名称の問題に戻ると、“旧来からの表象理論”を不可とする場合でも、それに代えて“表象（レプレゼンテーション）以上の理論”（more than representational）（下線は本稿筆者のもの）とよぶものの方がより妥当ではないかという考え方がある（この点について詳しくは大橋, 2019を見られたい）。これはかなり強い考え方である。

例えばドイツ、バイロイト大学のベルトラム（Erik Bertram）によると、この場合の用語として（Bertram, 2016, S.285）、ロリマー（Lorimer, H.: 2005）のように、「非、つまりノン」すなわち「非表象理論」という用語は不適當（unglücklich）で、「それ以上」すなわち「表象以上の理論」の方が好適という論者もあれば、反対にデューズベリ（Dewsbury, J.D.: 2010）のように、「それ以上」では結局、（通常の）「表象すなわちレプレゼンテーション」で良しということになり、それに戻ってしまう恐れが多分にある。これに対して「非、すなわちノン」にはそうしたことのない確実性（Gewissheit）がある。故にこの理論名称の方が望ましいという論者もある。

ベルトラム自身の見解は、詳しくは後述するが、スリフトは、物事について、単なる“参加的観察”（teilnehmende Beobachtung）ではなく、あくまでも“観察的関与”（beobachtende Teilnahme）が必要という立場をとるものであるから、そういう観点からすれば、「非表象理論」という用語の方が良しとされると、ベルトラムは力説している（Bertram, 2016, S.283-285）。

もっともこの点は、前記で一言したシンプソンにより、すでに次のように論じられている。

「“non”という接頭辞は、確かに“representations”やそれに関連する分析から離れること（moving away）を意味し、“non-representational theory”は“representations”を重大な（seriously）ことと考えるものである。それは、“破棄されてもいいコード”あるいは“追放されるべき幻影”（an illusion to be dispelled）などといったものではなくて、あくまでもパフォーマティブ（performative）なものとして、端的には“行為をすること”（doing）と解されるべきものである。故に（スリフトのいう）“non-representational theory”にとって問題となるものは、“representation”そのものではなくて、あくまでも“表象主義”（representationalism）といったもの、つまり“表象的な固着化および枠組み化”（representative fixing and framing）というものではないか」と論じている（Simpson, 2010, p.3）。

この点は以上とし、次に、スリフト説の方法論的的原理的特色として、スリフトにより次の2点が挙げられていることを、さらに指摘しておきたい（Thrift, 2008, pp.18-19）。

(3) スリフト説の方法論的的原理的特色

その第1点は、現代社会科学（modern social sciences）では、基本的な考え方（spiritual guide）について哲学に頼ることが比較的多いが、スリフトはそれに反対の立場にたつものであることである。スリフトは「（例えばフーコーなどの）哲学者の所論を社会科学に単純に導入し適用することは、社会学者のなすべきこと（function）とは考えられない」と宣し、続いて「現代社会科学が西洋哲学の提起しているテーマに対し、服従的關係（subordinate relationship）にあること、あるいは、

そうした哲学の提起しているものに単純に共鳴する (echo) ところに、社会科学の課題があると考えることは極めて疑問である」と提議し、そうした支配的哲学から独立したものを“野生的な考え” (wild ideas) とよび、社会科学は本来そうした野生性を有すべきであると力説している。ただしこの場合、ドゥルーズ (Deleuze, G.) らの説は例外で、スリフト説に有用なものとされている (Thrift, 2008, p.18)。

第2点は、上記とはある意味において逆で、社会科学では、実践性や政策志向性を一層強めることが肝要と主張するもの (more practical, policy-oriented) があることをいうものであるが、スリフトはこれらのものも社会科学理論の野生性をなくすもので、望ましいものではないと強く反対する。この点についてスリフトは、「こうしたものは、(社会運営上の) データの作成機関で採られている考えに合致することに志向し、従って方法論的厳格さという価値を犠牲にすること (fetishizing) に志向したものである。しかしそのようなものは、いずれ存在価値がないものとなって、社会科学理論たる意義を失い、自ら存在価値のないものになってしまうように思われる」と書いている (Thrift, 2008, p.18)。

本稿は、以上の問題意識にたってスリフトの非表象理論 (狭義) について大要を考察することを課題とする。まずその理論の性格についてスリフトが前提となるべき命題として3点を挙げているところを提示しておきたい。もっともこれは、理論的には、“広義の非表象理論”の領域に属すものと考えられるが、スリフトが今日の社会科学の持つべき要件についてどのように考えているかを示すものであり、ここで提示しておく意味があるものと解される。その3点とは、次のようなものをいう。

II. スリフト説の3つの前提

第1に、「この関連で必要とされる現代の理論は、社会科学のものと人文科学的なものである」という命題である (以下この部分は Thrift, 2008, pp.2-3 による)。これは、どのようなことを意味するのか。それは、スリフトが、ウォーリン (Wolin, S.: 2000) の説に依拠して、現在の社会生活において人々の生活を苦しめている問題の根源が次のところにあると考えていることをいうものである。

すなわち、今日の社会を特徴づけているところの、端的には人々の社会生活の基盤を形成している高度技術 (high-technology) とそれに立脚した世界的な資本主義体制 (globalized capitalism) は、根本的には、民主主義と両立しえないものになっている、という認識である。

この点は、周知のように原理的には、唯物史観によれば、技術進歩すなわち生産力の進展は、それに照応した生産関係すなわち社会生活体制を招来すると解されるものであるが、しかし実際には、社会関係が生産力の発展に照応せず、人間の働き方などが生産力の発展に振り回されることがないではない。スリフトは、まさに現代はそうした時代であるというのであるが、その場合スリフトは、要するに、それは社会領域の問題として論じられるべきものであって、技

術領域の問題として論じられるべきものではない、というのである。

事実スリフトによると、社会科学・人文科学では、多くの論者がこの問題について論じている。すなわち「社会科学でも人文科学でも多くの論者がこの問題について論じている。それは、ある意味では一種の“理論過多状態” (over-theorization) といっているものである。しかもこれらの理論の多くは、公的な政治的権力構造 (official structures of power) により生活を苦しめられている人々の立場にたつものであるようにみられる」。

ただしそれは、実態をみると、スリフトによると「数だけが多いものである」。つまりそれは、「人によると皮肉を込めて、こうした“永遠的な理論上の革命” (permanent theoretical revolution) は、いわゆる学者たち (brainy classes) が、それぞれのいわゆる独創的理論を提示することによって、その職を維持しようとしているだけのものである」といわれるほどのものである。

もとよりスリフトとしては、「こうした特徴づけは、あまりにも酷なものであるが、こうした批判的論評があるのも故なきことではない」とし、それは社会経済の発展の故であって、資本主義の世界的広まりに関連したものと考えられるべきものとしている。実はこれは、スリフトがここで提示する第1の命題を補足するものである。端的には、資本主義経済の範囲の拡大という規定であり、これが、現代経済のあり方について多くの論議を生んでいる背景であるとするものである。

しかし、スリフトのみるところ、これらの多くのいわゆる理論は、問題があるものであって、正解のものはない。それは何故か。スリフトによれば、要するにこれは、本来、かれのいう非表象理論を採るほか道がないものであるから、それ以外のものは、そもその問題のとらえ方や論究の仕方ですべて誤っているものとなるからである。

もっともこの問題は、直接的にはスリフトによると、求められている理論の性格において、多くの論者には誤解があることに起因するものである。つまりこれは、現代理論に必要とされるものが本来どのようなものをいうかにかかわるものである。

これが第2の命題をなす。スリフトはそれを「(現代に必要な) 理論は、分析的もしくは診断的な用具 (a diagnostic tool) たるものでなければならない」として提示している。この点についてスリフトは次のように論じている。

すなわち「それは、まさに現時点で起きているものを取り上げ、思索上の地形図的なもの (a speculative topography) に織り込むことを意図したものである。この場合物事は絶えず変化している。人間の経験 (experiences) も不変なものではない。つまり、経験に立脚したものといっても、経験自体が絶えず変化している」。ただしこのテーゼは、究極的には、理論は、経験に立脚し、それに依拠したものであることが必要というものと解される。

この上で、第3の命題が提示される。それは「われわれがわれわれの希望 (hope) についてわれわれ自身で考え直す (reconsider) という課題に取り組む場合、政治的に関与するものになる」ことをいうものである。この場合「このことは、結局、次のことをいう。すなわち、今や民主

主義の新しい日常的形態 (new everyday form of democracy) を提起することが、多くの人々の政治的望みになっている、ということである」。

この上にとってスリフトは、この『非表象理論』と題する書物が、新しい政治的ドメインを開ききっかけになり、なかんずく「経験上で与えられる事柄に対し厳しい態度で接することによって、政治的分野で新しい試み (inventions) が生み出される」ことを、ただしそれは、新しい民衆たち (new publics) が新しい政治的領域に入ることを、つまり、これまではこれらの者にとって直接問題となるものではなかった政治の問題を、問うものになることを内容とするものであると宣している。

この点を補足してスリフトは、さらに、このことは次のことを要請するものであると述べている。すなわち、一般の人々は自分たちが無力とを感じることを欠陥と考えるようにするものであること、および、権力関係を内部化しようとする常態に、人々の能力は削り取られるものであることを充分承知した上で、これは、世界を良くすることには限界などはないという意識を構築することを呼びかけるものなのである。

ちなみにパッチェット (Merle Patchett) によると、こうした立場にたつスリフトの非表象理論は、一言でいえば、「日常生活のパフォーマンス的提示 (performative presentation)、示威 (showing)、綱領 (manifestation) に志向したもの」とまとめられる。

ここにはスリフトの実際的な問題意識が十分に示されている。もっともパッチェットは、非表象理論 (一般) の意義について、次のように述べている。すなわち、スリフトやその他の論者により提起されているものの特徴は、次のところにある。つまりそれは、社会科学の知識が、これまでのところ、固定化したもの (the fixed) や死んだもの (the dead) に固着して活動を考えることを出発点にしてきたところにある。しかし、「こうした (旧来の形における) 表象すなわちレプレゼンテーションとその意味 (meaning) は、社会の秩序・組織・構造・過程を維持するという目的のために、種々な出来事や物事が日干しにされるといって、強い脅迫観念 (embalming obsession) を持つものであったところに意義があったが、しかし今や、これをなくすために、この世 (the world) を共同で作りに出す (co-produce) ことが課題になっており、それを担おうとするもの」が、まさに非表象理論であるというのである (Patchett, 2010, pp.1-2)。

次に、以上を踏まえた上で、スリフトの非表象理論の諸原理を考察する。

Ⅲ. 非表象理論の諸原理

この個所の冒頭でスリフトは、この場合の理論の根本をなす基本原理として2つの規定を提議している。

第1に、この理論は「種々な形態における動き (movement) を指導原理 (leitmotiv) とする」というもので、従って「人間生活は動きに基づき、動きの中にあるものとして論じることが必要」

とするものである（以下本部分は Thrift, 2008, p.5ff. による）。つまり、非表象理論は、何よりもまず第1に、人々や物事を動きにおいてとらえるものである、というのである。

この点を補足してスリフトは、次のように述べている。「われわれの根茎的 (rhizomatic) ではあるが分立的な (acentred) 頭脳に対し、理性的なもの (the reason) を生み出すものは、そのような動きという複合的なものであり、動きが展開されるとともに引き付ける力が高まることによってであると考えられる。されば、動きというものは、生命 (life) の活気ある全体 (animic flux) としてとらえられるとともに、他方では結局、遂行主体の主観的なこだわりなどから切り離された実在性 (ontogenesis) としてとらえられるものであって、すべての生き物が前進したり、後退したりして特徴的な仕方で動くことをいうものである。故に動きは、光り輝くこともあるし、日常的な平凡なものであることもあるところの、喜び (joy) を現すものである」(Thrift, 2008, p.5)。

この上に加えて、第2にスリフトは、このことによって「非表象理論は、構成主義 (constructivism) を超えるものとなる」と規定している。スリフトのいう非表象理論とは、根本的には、以上2つの基本原理に立脚するものであるが、実際には、以下の7つのテーゼにより特徴づけられるものである。

(1) 「オンフローの考え」

これは、非表象理論は、まず第1に、日常生活をオンフロー (onflow of everyday life) でとらえようとするもの、ということである（以下本部分は Thrift, 2008, pp.5-7 による）。スリフトによると、故にそれは“実体論” (substantialist) に留まることには反対で、“ヴァイタリズム” (vitalist) に賛成ということになるが、これには次の3点のコメントが付くものである。

第1のコメントは、スリフトの提起するものは、経験論でも、単なる“感覚知覚的なもの” (sense-perception) や、観察をそのまま土台とするもの (observation based) ではなくて、その意味では革新的 (radical) な経験論というべきものであることである。それはスリフトによれば、ジェームズ (James, W.: 1999) からホワイトヘッド (Whitehead, N. L.: 2004) に通じる考え方であるところの、現実的経験の生々しい直接的体験 (the lived immediacy) に立脚し、なんらかの解釈や翻訳 (transitive) などを避けることに志向したものと定義される (Thrift, 2008, pp.5-6)。

この点についてスリフトは、例えばプレッド (Pred, R.: 2005) が⁵、ホワイトヘッド説に關説して、次のように述べているところを引用している (cited in Thrift, 2008, p.6)。すなわち、ここで関心の持たれることは、ホワイトヘッドが革新的経験論の範囲を拡張していることである。つまり、ホワイトヘッドは、単純にわれわれの意識について一般通例的な考え方に留まるのではなく、(変化の) 瞬間 (moment: 以下モメントという) をも究明しようとしている。つまりホワイトヘッドは、なんらかのモメントが省略されることに反対のものである。この場合モメントは、あくまでも、ある経験から他の経験への移行時におけるある種の瞬間的な経験としてとらえられるべきものと主張される。

これは、「こうしてホワイトヘッドにより、現実の事物の実体 (entities) および関連の様相は精密に、かつ完全に描くことがなされたのであり、これによってこの世界は初めて“1つの実体ある全体” (one-substance cosmology) として提示されることができた」と評されるものである (Thrift, 2008, p.6)。

スリフトが革新的経験論とよぶものの大要は以上であるが、さらにスリフトはこの場合、通例的な認識論的方法には追加 (addendum) が必要とし、それは“認識以前のもの” (the pre-cognitive) があることであるとする。これが、「オンフロー」に関する第2のコメントである。

この点については、スリフトによると、人間の意識 (consciousness) は知覚 (perception) にとつてごく狭い窓口に過ぎないものであることが出発点の認識である。例えばそれは、時間にすれば、通常、ほんの数秒のものである。はっきり意識したというようなことは、通常はない。故に通常的には、意識は無意識 (unconsciousness) のものが浮かび上がってきた (an emergent derivative) と考えられるものである。すなわち、意識といわれるものは、ルーチン化された環境において身体や事物の様々な取り合わせから、神経がフル回転する度合いのいかんにより、身体にはどのように動くかについて意識前に起きるものがあると考えられる。「故に、こうした考えの論理的結論は、われわれは前意識的なものにもっと注意を払うべきである」ということになる (Thrift, 2008, p.7)。

「オンフロー」に関する第3のコメントは、動きが行われる単位 (unit) にはどのような範囲があるかにかかわるものである。この点についてスリフトは、ほとんどすべての行為は、共同的行為 (joint action) として行われるものであるとする。そこでは複数人のペアであること、複雑なおしゃべりの消化、身体による意思表示、その場の空気を読むことなどが肝要であり、かなりの評価作業や記憶的作業を必要とするものと特徴づけ、それは、端的には、戦略的共同作用 (strategic joint action) というべきものと規定している (Thrift, 2008, p.7)。

これら3つのコメントの上にならべてスリフトは、こうした点からみると、認識 (cognition) は、単なる行為遂行的 (performative) 局面ばかりではなく、理論的 (theoretical) 局面にも注目する必要がある、これら諸局面は想像力 (imagination) とよばれるものの土台になるものであろうとし、それ故さらに、非表象理論では“プレイ” (play) が重視されるものになると提議している。プレイは、スリフトによると、多大な感動的意義 (immense affective significance) を持った永遠な人間行動 (perpetual human activity) と位置づけられるものとされている (Thrift, 2008, p.7)。

この部分における以上のスリフトの所論をみると、本稿筆者としては結局、フォーコーなどで強調されているディスコース論に通じるものがあるという思いが残る。ただしここでは指摘するだけに留め、次に、スリフトが非表象理論の第2のテーゼとして掲げている、「非表象理論は断固として反個人伝記的なもの (anti-biographical)、つまり個人以前のもの (pre-individual) 志向のものである」点を考察する。

(2) 「個人中心主義反対性」

この部分の冒頭においてスリフトは、「非表象理論は、断固として個人伝記的なものに反対であり、個人以前のものに志向するものである」と書いている（以下本部分は Thrift, 2008, pp.7-8による）。これらのものは、何よりも“主体土台的 (subject-based) ではない知覚様式”に立脚するもので、スリフトとしては、取り扱いの仕方 (modes of proceeding) ではフロイトと同様のものであり、「自らでは自叙伝や伝記的なものに対し疑問 (suspicious) や敵意 (inimical) すらも抱いているものである」と宣している。つまり、個人崇拜反対である。

故にスリフトによると、これは「人間が一人であること (oneness) を好み、死んだ人と親しくしたいだけのことをいうもの」と評されるかもしれないが、しかしスリフトとして強く望んでいることは、“物的な図式主義” (material schematism) は止めて、多くの人や場所との相互関係を作り上げることである。この場合、物的な図式主義とは、すべての物の価値を事物、すなわち金銭の量により推し量り処理するものをいう。

これに対し人間の相互関係に立脚するものは、様々な場所における人々の相互関係に立脚するものをいう。これは、スリフトによると、社会科学領域ではすでに、例えばギデンス (A. Giddens) らによって提起されてきたものをいい、スリフトとしても 1970 年代に提示した“時間・空間および空間・時間” (time space and space time) にみられるもの (Parkes and Thrift, 1980) であるが、さらに“ネットワーク理論”やドゥルーズ／ガッターリ (F. Guattari)、カーター (P. Carter) の所説に見られるものであるとしている (Thrift, 2008, p.8)。

そこでこの点をまとめていえば、スリフトが主張せんとしていることは、社会的あるいは文化的な現象はすべて、“思考の物質性”にあることを強調し、物的文化の研究、科学の社会学、パフォーマンス研究を含まなくてはならないことを主張するところにある、と思料される。

この上にとって、第3のテーゼとして「実践 (practice) の重要性」が提起される。

(3) 「実践志向性」

この部分の冒頭でスリフトは、「非表象理論は、それ故、実践に集中点をおくものである。というのは、それは仕事や、その仕方の物的実体 (material bodies) に焦点をおくものであるからである」とし、さらにそれは「物的実体が長期にわたり安定性を持ち、例えば組織作業上の定規的なものを定めたり、あるいは、これまでにはなかった仕方を創出したりすることによって、自己自身を再生産することができるようにするものであるからである」と規定している（以下本部分は Thrift, 2008, pp.8-9による）。

故にこれらの物体の実体は、どのように規定されるかといえば、端的にはそれは、実践を経た成果をいうものとなる。それぞれのアクターについていえば、他のものにより支えられていることから生まれる成果を意味し、自然のままでは荒々しくて損害すら生じる自然の事実が統御されていることから生まれる成果、と規定されるものである。

そこでスリフトは、一方では、これらの物的実体は絶えず革新を迫られており、進歩が必須なものとして規定するとともに、他方では、革新がうまく進まず、結局消滅になるものもあるが、いずれにしろアクターたちの実践・実働のいかんが問題であると提議している。

故に次に、第4のテーゼとして「事物 (things) の価値平等性」が提起される。

(4) 「事物の価値平等性」

これは、端的には、「非表象理論は、これまで常に、それぞれの事物の広範な作用 (vast spillage of things) について、それらには等しいウェイトがあるものと考えてきた」ことをいうものである (以下本部分は Thrift, 2008, pp.9-10 による)。

ただしこれは、スリフトによると、あくまでもそれぞれの事物自体が持つところの、意味形成上のエネルギー (the energy of the sense-catching forms) に着目すべきことをいうものであって、逆にそれが、他のものによって覆われていること (cladding) によって惑わされてはならないことをいうものである。ところが事物には、完全に固着したと思われるもの、つまり化石化した不安定性 (petrified unrest) がある。これに対しては、スリフトは3つの考え方があるという。

その第1は、事物はもともとハイブリッドな集合体 (hybrid assemblage) の部分たるものと考え、具体化 (concretions)、セッティング (settings) およびフロー (flows) があるとするものである。そのいかんにより事物の意味は異なる。

第2は、人間にとっての意義・意味を考える場合である。例えば人間では、社会的位置などによって、使用する事物の質や量が異なる。道具なども使用の目的や方法が異なることが多いことをいうものである。

ただし以上は、スリフトによると、技術の持つ前意識的なもの (anteconscious) および非意識的なもの (unconscious) をさすものであるが、これに加えて、今1つの (第3の) ものがある。

それは、「人間の身体 (body) がそれ以外の事物と交互作用するところから生まれるもの」をいう。その原点になるのは、人間の身体はそもそも道具的存在 (a tool-being) でもあるという認識である。この上においてそれにはいくつかの考え方があり、スリフトのみるところ、「人間の肉体 (flesh) の諸特徴を無視することは、確かに賢明なことではない。同様に人間の身体 (body) についてメイキャップ (make-up) することを然るべきところで止めたりすることも賢明なことではない。反対にそれを無制限に行うことも許されない。それには限界があると考えべきである」と論じている。

この上にとってスリフトは、人間の身体の動きの象徴、頂点にあるものとしてスポーツに言及し、大綱的には、現代スポーツでは「動くことには流動性 (fluidity) があること、直観性 (intuition) と工夫 (invention) があることを証している」ものとしている (Thrift, 2008, p.10)。

そこで、第5のテーゼとして「非表象理論、すなわちノン・レプレゼンテーション理論は経験立脚的なものである」ことが提起される。

(5) 「経験立脚性」

この点についてスリフトは、特段の説明は不要とし、スリフトとしては、これは「パフォーマンスの際のエネルギーを概念設定上で利用するために、社会科学の中に取り入れようとしただけのものである」と断った上で、「社会科学では、パフォーマンスは、概念上厳密さに欠けるが故に意識的に取り入れることがなされてこなかったのではない、という議論があることは、これを充分承知している」。故にスリフトとしての考えを提示するとして、以下の4点を挙げている（以下本部分は Thrift, 2008, p.12 による）。

第1に、これまで概念は、結局、実験室的なもの (laboratory) で、実世界の豊かさ (richness) をとらえることができなかつたのではないかというものである。それは精々リハーサルというべきもので、厳密には実体 (a rigorous entity) をとらえたとはいえないものであった。

第2に、この世には多くの実体がある。それらに名称を付けることは、確かなにされてきた。しかしその実際の姿 (traces) がとらえられたのは、ごく少数である。つまり実体ならびに実際の過程は、はっきりととらえられてはこなかった。

第3に、従ってパフォーマンスは驚くべきことを社会科学に注入するものである。それはすべてのことを説明する (explain everything) と考えてもいいものである。

第4に、これまで社会科学は読むこと (reading) だけを前提にしてきたところがあるが、現在ではこれを超えて感動 (affect) やセンセーション (sensation) に関連したところのバーチャル現実 (the virtual) を前提にすることが、至上命令 (imperative) になっている。

ただしこの点は、スリフトによると、次のテーゼ、すなわち「非表象理論は、感動とセンセーションを強調する (stress) ことによって人間思考の全面にわたって (the full range of registers of thought) 迫ろうとするものである」ことに関連する。

(6) 「感動とセンセーションの評価性」

この点についてスリフトは、冒頭において、「感動とセンセーションは、記号 (signs) とシグニフィケーション (significations) に並ぶ重要性のある知覚概念 (concept-percept) である」。これは、一口でいえば、感動ターン (an affective turn) といわれるもので、これまでの歴史上では、例えばスピノザ、フロイト、トムキンス、エクマンおよびフェミニズム論者により論究されてきたものであるが、しかしそれ相当な学問的評価がなされたのは、ようやく近年のことであると述べ、その上で「ここには一定最低限のヒューマニズムがある。このヒューマニズム上の主題こそを取り上げるものである」と力説している（以下本部分は Thrift, 2008, pp.12-13 による）。

これに対しこの点に関するこれまでの近代の歴史は、スリフトのみるところ、簡単にいえば、反ヒューマニズム的な考え方 (anti-humanist position) が支配的なものであった。例えば19世紀にはバルザックなどに代表される退化主義的な (degeneration) パロディ化が生起し、そしてブルジョア的な立場にたつ唯美論的なもの (aesthetic) が展開され、その影響のもとに身体的な動き、す

なわちジェスチャーや表現 (somatization) は、単なる可能性 (mere potentiality) を示すだけと位置づけられるものとなってきた。

この場合スリフトによると、こうした人間退化主義の傾向は、さらに産業システムのオートメーション化とともに進展したものとなった。そしてこの上にとってスリフトは、自らの考えについて「こうした機械 (論) 的な絶壁面 (machinic cliff face) を前に、ヒューマニズムの砦を構築したいと念願しているものである」と宣している (Thrift, 2008, p.13)。そして、これについては3つの考え方に立脚することが可能とする。

第1に、世の中では共同的な行為 (joint action) をとることが可能であること。そしてその場合世の中のことを理解する一定様式があると考えられることである。第2に、その際異なった社会分野を超えた共同的作業をすることが定期的に行われるようにすることが可能なことである。第3に、世の中の人には不断の行動において無意識的に動く“適応的な無意識性” (adaptive unconscious) があると考えられることである。つまり人間は、最深部にある無意識層でも矛盾的存在であって、無意識層では現在の社会のあり方に対し批判的な心情がある場合でも、実際には無意識的に現体制に適応的な言動をとるものであると考えられることである。これらの3者は、スリフトによると、かなり大きな意義ある働きをするもので、通常、エージェンシー (agency) といわれるものと同様な作用をするものと位置づけられる。

この場合、スリフトが感動とセンセーションをよぶものとして念頭においているのは、例えば立派な建物、すなわちビルディング (building) であり、音楽であり、ダンスであるが、スリフトによると、中でも現在では特にダンスが注目されるもので、それは「時間と空間を新しい運動的な形に投げ込むものであり、開放的パフォーマンスの長い多様な歴史につながり、…そして動きの中における思考としての直感のウェイトを高め、ジェスチャーという言語以前のもの (underlanguage) を前面におき、改めて進化とは何かをわれわれに教えるものである。このようにして、それは今や、理解すること (understanding) とは何かを理解することの中心点におくところの、イミテーション (imitation) とサジェスション (suggestion) という認識過程のキーポイントになりうるものである」と規定している (Thrift, 2008, p.14)。

この上にとって、さらに論究されるべきものに倫理 (ethics) の問題があることが提議される。そしてまず、古典的な人間観 (the classical human subject) について、それは透明的 (transparent) で、合理的 (rational) であり、継続性 (continuous) のあるものではあるが、もはや妥当性を有さないものとする。すなわち「『私は何をしてきたか』あるいは『私は何をすべきか』というような古典的な倫理的な問題では、そこで主格になっている『私』がどのような者をいうかが (實際上) 不明確であるが故に、答えられないものになっている。『何』についても同様である」と論じている (Thrift, 2008, p.14)。

その上において、結局、スリフトによると、それは、「ごく親しい者 (very familiar) 同士でも所詮見知らぬ (strange) 関係にあるという“共同性から生まれる一般化された倫理” (a generalized

ethic out-of-jointness) というものになるであろう」という。ただしスリフトとしては、今や社会一般的全般的なものになった見知らぬ者同士の関係という問題に回答を与えるというものとしてではなくて、この倫理は、“より多く生きること” (more life) というテーマに結びついたものとして考えられるべきものであり、いずれにしろ、はっきりしていることは、われわれは日常生活では、こうした点でプレッシャーを多く感じているものではなく、かつ行動範囲の縮小を余儀なくされているものでもない、ということであるとしている (Thrift, 2008, p.14)。

以上のようにスリフトの非表象理論では、人間は何よりも動的なものとして、感情を有し、それにより動かされるものとしてとらえられ、そしてその場合1つの全体 (the whole) としてとらえられることを必要とする。これが最後のテーゼとして提起される。

(7) 「全体としての人間行動の場の構築性」

この点についてスリフトは、冒頭において (非表象理論の規定に関して) 「最後に、空間 (space) の問題について再度論じたい。ただしこれは、狭い学問的な観点 (disciplinary reasons) からではなくて、実体的な (substantive) 観点からすると、場所は、以下で論じるような大きさのもの (large) になる」という視点のものであると提起している (以下本部分は Thrift, 2008, pp.15-18 による)。

そしてここで学問的なものとは、例えば人類学、考古学、建築学、地理学、パフォーマンススタディの多く部分をいい、今やそうしたものを超えたものが必要というのであるが、これは、これまでの“恣意的な経験主義” (random empiricism) では、社会 (society)、階級 (class)、ジェンダー (gender)、民族性 (ethnicity) 等において起きている変化を充分にはとらえられないからである。というのは、スリフトによると、これらの変化は、同一の根源 (an equal footing) のもとに起きているものであるからである。

それ故、単一の経験的事実といわれるもの (a simple empirical fact) も複雑化していると考えer必要がある。ところが、これらの学問といわれるものは、この事実を深く究明しようとするのではなく、場所についてみると、場所はいくつかのパーツ (parts) により共鳴されるだけのものという観点にたっており、かくて「その全体 (the whole) が各パーツの集合 (the sum of the parts) 以上のものであることは看過されている」のである (Thrift, 2008, p.16)。

従ってスリフトとしては、「空間というものは比喩的なもの (metaphorics) ではないし、空間一般 (space in general) として1つの超越的な原則 (a transcendental principle) で説明されるものでもないし、単にそれぞれの地域で決められるいろいろなテーマで決まるというものでもない」と規定される。これらのものは、いわば“空間関係” (spatial relations) といっているものであるが、スリフトとしては、それらは1つのものの発現形態 (qualities in one) であって、発現形態には3つのケースがあるとする。

第1に、もともと1つの集合体であるところの多様性 (a variety of assemblage) が、新しく混じり合って当該空間について新しい意味 (new-senses of space) を生み出す場合である。

第2に、当該空間のそれまでは認められてこなかったようなメリットである点が、改めて発見され、注目されるものとなる場合である。

第3に、例えばこれまでは危険で立ち入り禁止になっていた所が、所要の危険防止策がとられることによって、立ち入りや居住ができるようになった場合である。

以上は、スリフトによると、あらゆる事物 (all things) を測る手段として、遠さ (近さ) が消えること (banishing) と総括される (Thrift, 2008, p.17)。ちなみに、多くの文献をみると、近さを求めること (a drive towards nearness) が関心の中心になってきたといわれる。つまりそれは、要するに、(自己の) 身体への近さが、この世をとらえる主たる決め手 (main geometer) になってきたことを意味するものである。

これは、スリフトによれば、生物的な身体、つまり肉体を、内部のものとして、説明の中心におくものであるが、しかし胃や腸のように器官では、内部的なものであると同時に、外部的なものとして、すなわち摂取された事物の貯蔵庫として考えられる必要があるものもある。

故にスリフトとしては、現象学的な (phenomenological) 伝統にとらわれないで、近さやそれに相当なもの (nearness or ambience) に対する配分 (distribution) をもって代替させるのが望ましいし、必要であるとする。アクターという観点からいっても、この範囲や規模は常に変化する、と考えるべきであるという。この点についてスリフトは以下のように述べている。

すなわち「われわれの理解しているところによると、日常生活の空間とリズム (rhythms) は、土台をなす社会的機構を支えている繊細な金銀細工物といったものではなく、物事が常にエネルギーに変えられる物的機構 (a materialism) たるものと解されるものである。されば“われわれ”といわれるものは、“一連の人間同士のもの” (a range of transhuman) と書き換えられる (redefine) べきものである」(Thrift, 2008, p.17)。

こうした考え方をスリフトは、簡単には (いわばエスノメソドロジーに対抗して) “エソロジーに立脚した動き” (onto-ethological move) と規定し、それは、要するに、「1つの動作面は、当該アクター (複数を含む) のいかにだけで決まるものではなくて、あくまでもすべての種類の媒介的な空間から成り立っていることをいうものである」と宣している (Thrift, 2008, p.17)。

これをみると、少なくともこの点では、スリフト説はアクターネットワーク理論の批判の上になつて、それを発展させようとするものと解される。

ちなみに、カドマン (L. Cadman) は、スリフトの非表象理論について、それはアクターネットワーク理論と密接に関連したものであるが、しかし同時に、他方では、重大な相違点はいくつかあるものである。アクターネットワーク理論では、人間的なものと非人間的なものとの方法的均整 (methodical symmetry) にこだわるのに対し、非表象理論ではそうした点が少なく、日常生活上の出来事にかかわる人間の身体・主体 (human body-subjects) の実践に主眼をおく。故にまさに「この点こそ、アクターネットワーク理論が非表象理論に強く反対する点である」と書いている (Cadman, 2009, p.3)。本稿筆者も同意見である。

IV. あとがき

以上において、スリフトの狭義の非表象理論の概要について論述し、折に触れて本稿筆者の見解も開陳してきた。しかしスリフト説の本丸というべき論説は、いうまでもなく、広義の非表象理論たる現代資本主義社会の分析にある。この点について、本稿筆者は稿を変えてレビューするよう予定しており、スリフト説そのものについての本稿筆者の見解もそこで提示したい。ここではスリフト説の根幹の理解にかかわる若干の点について述べ、終りの言葉とする。

第1点は、アクターネットワーク理論についてである。スリフトは、アクターネットワーク理論と密接な関連性 (many affinities) があることを認めつつも、アクターネットワーク理論には極めてシビアーな問題点があるとし、(例えばネットワーク・イベントが“制度化された対象” (an instituted object) として重視されるために (Thrift, 2008, p.50)) 「アクターネットワーク理論は、ヒューマニズムの観点を軽視しているという重大な難点がある。端的にいえば、人間主体 (human subject) を中心にしたはっきりとした支配性 (an exact dominion) の樹立という考えに反対なものである」とし (Thrift, 2008, p.111)、さらに重大な問題点は、「アクターネットワーク理論では、この世界について各種の集まり (collectives) が絶えず発展しているものとしてとらえられる。従ってそれでは、“社会” というものがあること (the notion of the society) は、これを放棄しよう (discard) と主張される」ところにある (Thrift, 2008, p.252)。スリフトとしては、このようなものには到底、全面的に賛同できるものではないとしている (この点については大橋, 2014, 2015 を参照されたい)。

第2点として、ドイツの論客、ベルトラムが、スリフトの非表象理論の基本的論点について総合的にどのように論じているかを紹介しておきたい。ベルトラムの論説 (Bertram, 2016) は、非表象理論について、既述で一言したように、端的には「それは、理論の関連する領域 (Theoriebezüge)、および取り上げる分野の拡大の仕方 (Heran- und Vorgehensweise) において実に多様で (divers)、かつ多質的な (heterogen) なものであり、1つの思考方法 (ein Denkstil) とはいえない」とするものである。

ただしその場合、非表象理論は次の点を中核的前提 (zentrale Annahme) とするものである。すなわち「人間は、確かに社会的分野では重要なアクターである。しかしその場合、人間は、人間だけで行為をするものではなく、あくまでも理論的には、物的過程の中で (innerhalb materieller Prozesse) で動くと解されなくてはならないものである。この場合物的過程は、人間の行為と代表物 (Repräsentieren : ここでは記号などをいう; 本稿筆者注) とによる内部過程になっているものもあれば、外部過程をなしているものもある」 (Bertram, 2016, S.284)。

このようなベルトラムによる特徴づけは、非表象理論についての現時点における論評として適切なものと考えられるが、この上にたつてベルトラムは、例えばヴァンニイ (Phillip Vannini) により、非表象理論には次の点で問題があるものと提起されていることを指摘している (Vannini, 2015, zitiert in Bertram, 2016, S.285)。

それによると、非表象理論は確かに有効性と豊かさ (wirkungsreich) を持つものである点において大いに注目されるものではあるが、しかし、理論性が充分ではないとされている。つまり、関与領域が多様で多質的なものであるために、理論的整合性に弱い (Verworrenheit) ものとされ、非表象理論については、有効と認められた適用例が少なく、依然として方法論上で問題が多くあるものとされている。

この点、つまり方法論的に問題があるという点については、ベルトラムも大筋においてこれを認め、ドイツでは、ディルクスマイヤー／ヘルブレヒトの所論 (Dirksmeier und Helbrecht, 2008 ; この論考については大橋, 2019 で論究している) を例外として、方法論的研究では空白 (Lücke) があることは認めざるを得ないとする一方、ドイツでは次の3点で非表象理論の進展に努めてきていると提議している (Bertram, 2016, S.284)。

第1に、ベルトラムの論文は、もともと非表象理論の観点にたつて、ボンにおけるゴミ収集問題について解明を試みているもので、その際ゴミは、排出物たる側面と再生使用される原料となる側面との2面性のあるものという観点にたつものである。故にベルトラムとしては、それは、非表象理論にかかわって、「経験に立脚したアメリカ的な理論一辺倒的なもの (anglophonen theoriebetonenen) に対して、ドイツ的な試み (germanphone Auseinandersetzung) を提示したという意味があるものである」としている。

第2に、この研究方法の名称に関してドイツでは、既述のように、“非表象理論”と“表象以上の理論”のいずれを良しとするかの論争があり、ともかく方法論的論議が重ねられたという経緯があることである。

第3に、言語上の相違にかかわる点で、この相違は、理論伝播の上では過小評価されてはならないことである。

この上にあつてベルトラムは、これまで主として国際的に行われているこのテーマに関する方法研究に対し、ドイツ的基盤からこれに加わることには、それ相当な意義があるものと提議している。これを、日本的基盤と置き換えれば、本稿の意義はそこに尽くされていると考えるが、本稿筆者としては、スリフト説が、何よりも現代資本主義分析を課題とし、その出発点に「現代社会における商品生産事業」 (the business of commodity production) のあり方を置いていることからいっても (Thrift, 2008, p.22), いわゆる日本的経営を中核にした日本企業に立脚した非表象理論 (japanphone) の展開されることが期待される。

ちなみにこの場合ベルトラムは、(前掲ベルトラム論文の) ゴミ収集問題の理論構成上では、その構造 (Gefüge) の設定が最も肝要な問題になるとするが、その理論構成ではとりわけドゥルーズとガッターリの説が有用であるとして、当該論文第3章のタイトルでも、それを“ドゥルーズ／ガッターリ”(単数)として、すなわち原語で示すと“Deleuze und Guattari Konzept vom Gefüge”として、その旨をはっきり掲げて強調している (Bertram, 2016, S.288-289)。

しかし、ガッターリについては、少なくともスリフトの2008年のこの書に関する限り、本稿筆

者のみるところでは、少し事情の異なるように認められる。というのは、第1に、確かにそこでは、ドゥルーズとガッターリとの共著本2冊 (Deleuze and Guattari, 1987, 1994) を参照している個所 (例えば Thrift, 2008, pp.8, 24, 155, 169) およびドゥルーズの単独書を参照している個所 (Thrift, 2008, p.118) と並んで、ガッターリの単独書を参照している個所 (Thrift, 2008, p.188) があるが、ところが巻末の参照文献欄では、ドゥルーズとガッターリとの共著本とドゥルーズの単独書は挙示されているが、ガッターリの単独書は全く挙示されていない。

他方、第2に、2009年に『フェリクス・ガッターリ—その批判的紹介』というガッターリに関する単独書を刊行しているカナダ、レイクヘッド大学のゲノスコ (Gary Genosko) は、同書の冒頭において「ガッターリは、フランスの著名な哲学者である。多分、フランスの哲学者、ドゥルーズとの“資本主義と分裂症 (capitalism and schizophrenia)”という思い切ったテーマについての共著作業 (collaboration) で最もよく知られているものである」と書いている (Genosko, 2009, p.1)。しかし巻末の参照文献欄では、スリフトの著は挙示されていない。

ベルトラムのこの論考 (Bertram, 2016) に戻ると、上記のように、あくまでもドゥルーズ／ガッターリ説として提示されているので、そこでは理論的基盤としては、総括的には、スリフト説はいわば“ドゥルーズ—ガッターリ—スリフト”という線でとらえられるという考え方があるものとみられる。ところがこの点についてシンプソンでは、やや異なる見解が提示されている。

これが第3点である。すなわちシンプソンによると、スリフトのいう「非表象理論は、“ドゥルーズ—ニーチェ”の線 (Deleuze—Nietzschean vein) にたつて、センチメント (sentiment) を基本動因にすると解すべきものである。しかもその際根本的立脚点になっているものはニーチェにあって、ドゥルーズのいう『それは自分で判断しよう』 (let us judge it) という命題ではなくて、むしろニーチェのいう『それは自分でやってみよう』 (let us try it) という命題の方がはるかに正鵠を射たものである」と論評している (Simpson, 2010, p.3)。

これは、スリフト説の理解の上で大いに参考にすべきものと考えられるが、こうした点に関する考察は、他日の課題とする。

参考文献

- Bertram, E. (2016), Non-representational thinking: Methodologische Überlegungen anhand des Bonner Sperrmüllassemblages, *Geographica Helvetica*, Nr.71 (special edition), S.283-301.
- Cadman, L. (2009), Non-representational theory/Non-representational geographies, retrieved August 20, 2018, from: <http://booksite.elsevier.com/Nonrepresentational-theory-and-Geographies.pdf> (published 2009)
- Deleuze, G. and Guattari, F. (1987), *A thousand plateaus: Capitalism and schizophrenia*, London: Athlone.
- (1994), *What is philosophy?*, London: Verso.
- Dewsbury, J. D. (2010), Language and the event: the unthought of appealing worlds, in: Anderson, B. and Harrison, P. (eds.), *Taking place: Non-representational theories and geography*, Farnham: Ashgate.

- Dirksmeier, P. and Helbrecht, I. (2008), Time, Non-representational theory and the “performative turn” - towards a new methodology in qualitative social research, retrieved August 20, 2018, from: https://www.geographie.hu-berlin.de/de/Members/helbrecht_ilse/downloadsenglish/performativemethodology/@@download/file/Dirksmeier_Helbrecht%20Time%20nonrepresentation%2020.03.2008.pdf
- Genosko, G. (2009), *Félix Guattari: A critical introduction*, London: Pluto Press.
- 泉谷洋平 (2001) 「地理的スケールの非表象理論的再構成—または (行為遂行的) / (パフォーマティブ) な場所論」日本地理学会発表要旨集
- James, W. (1999), *Some problems of philosophy*, Harvard University Press.
- Lorimer, H. (2005), Cultural geography: The business of being “more-than-representational”, *Progress of Human Geography*, vol.29, pp.83-94.
- (2015), Afterward: Non-representational theory and me too, in: Vannini, P.(ed.), *Non-representational methodologies: Re-envisioning research*, London: Routledge, pp.177-187.
- Parkes, D. N. and Thrift, N. J. (1980), *Times, spaces, and places: A chronogeographic perspective*, Chichester: John Wiley.
- Patchett, M. (2010), A rough guide to non-representational theory, retrieved 2017, November 30, from: <https://merlepatchett.wordpress.com/2010/11/12/a-rough-guide-to-non-representational-theory/>
- Pred, R. (2005), *Onflow: Dynamics of consciousness of experience*, MIT press.
- RGS-IBG (2020), Call for papers: Non-representational geographies, retrieved February 20, 2020, from: <https://hpg.org.uk/2020/02/06/rgs-ibg-2020-call-for-papers-non-representational-geographies-approaches-methods-and-practices/>
- Simpson, P. (2011), What is non-representational theory? extract from Simpson, P. (2010), Ecologies of street performance: Bodies, affect, politics, retrieved August 20, 2018, from: <https://psimpsongeography.wordpress.com/2011/06/07/what-is-non-representational-theory/>
- Thrift, N. (1996), *Spatial formation*, London: Sage.
- (2005), *Knowing capitalism*, London: Sage.
- (2008), *Non-representational theory: Space/ politics/ affect*, London: Routledge.
- Vannini, P. (2015), Non-representational research methodologies: an introduction, in: Vannini, P. (ed.), *Non-representational methodologies: Re-envisioning research*, London: Routledge, pp.1-8.
- Watson, T. (2017), *Sociology: Work and organisation*, 7th. ed., London: Routledge.
- Whitehead, A. N. (1978), *Process and reality*, New York: Macmillan.
- Whitehead, N. L. (2004), Rethinking anthropology of violence, *Anthropology Today*, vol.20, pp.1-2.
- Wolin, S. (2000), Political theory: From vocation to invocation, in: Frank, J. A. and Tambornino, J. (eds.), *Vocations of political theory*, University of Minnesota Press, pp.3-22.
- 大橋昭一 (2014) 「今日における協働体のとらえ方—ラトウールのアクターネットワーク理論の研究」『和歌山大学・経済理論』378号, 81-101頁
- (2015) 「アクターネットワーク理論の進展過程—物質主義志向的アクターネットワーク理論を中心に」『和歌山大学・経済理論』379号, 41-62頁
- (2018) 「記号論とは何か—「観光記号論」の礎石構築のために」『和歌山大学・観光学』19号 (観光フォーラム), 57-62頁
- (2019) 「最近における記号論拡張の進展過程—ツーリズム記号論基本原理研究の序章」『和歌山大学・観光学』21号, 15-25頁

Understanding Non-Representational Theory: How to Grasp Present-Day Society

Shoichi OHASHI

Abstract

This study elucidates the characteristics of the emerging so-called non-representational theory in contrast to the more-than-representational theory to better understand present-day society. It argues for the development of a special non-representational theory adapted to Japanese situations based on the Japanese system of management.